



景内の堂聖本寝就女神生

緒論

神學上の三徳——信望愛について。

以

上我らは、上帝の前に眞の人となるを願ふ爲に、眞の上帝なるヘリス
(エウレイ十一の六) トスの教を述ぶるについて、實際上からこれを信仰と善行の二つに別け
(イアコフ二の廿四) 聊か大意をおはなし申しました。然るに又これを神學上の徳行
 から別けると、信望愛の三つとなります。(コリント前十三) 此中「信」の何たることにつ
 いては、我らは既に前編に於て申し述べました。即ち救ひに關はるとの一切の源で
 悉くの善行の土臺です。又「愛」の何たることについては、後編に於て概略申し述べま
 した。即ち善の本體たる上帝を愛するには善行を以てすべき事でありませう。そ
 れは愛の性質は、人がでくるだけ進んで上帝に肖るをつとむるに在るからであ
 りませう。而して「望」は、信と愛の間に立て二つの徳をつなぐくさりであります。

望は、猶信仰の如く未來に向ふはたらきで、信仰の認めたとを望みの力で守るものです。而して望は、又愛に力を向けてこれを固めます。そこで階梯者イオアンはこれを説て『愛の力は、望に在り、何となれば愛の爲に得る所の賞は、望を以て之を俟てばなり、望は愛の門なり、望の愈々窮するは愈々愛を失ふを致す』と申してゐます。故に聖使徒は、我らに上帝の大仁慈を記憶して望みを勵ますべきを訓へて『我らの望みの承諾を固く執りて移らざるべし、蓋し許約せし者は誠信なればなり』と申してゐます。(エウレイ十) とも我らは生れながら有罪不完全の者で、若し此まで打棄てらるれば、其行末は只禍ばかりである。然るに主イ、ス、ハリストスは、其十字架と死を以て我ら罪人を贖ひ、上帝の怒りを消して父の憐みと爲してくださりました。そこで我らが望みの大原は、一に至仁なる主イ、ス、ハリストスに在ります。(テロフエイ前一の十三) 故に主イ、ス、ハリストスも、自ら我らに御身の名に依て祈禱すべきを訓へました。(イオアノ福音十) 斯様な

至と親切なる大仁慈なる主を、持み、彼は必ず我にさいはひを賜ふといふことを確信して、彼に依て安心するのは即ち望みの有効なる所以であります。

終に信仰も望みも一切合せて神靈道徳の完全を成すものは、愛であります。聖使徒は此を謂て『愛は凡の事を信じ、凡の事を望み、凡の事を忍ぶ』と申してゐます。(コリント前) 捧主者聖イグナタイの言に『信仰と望は、愛と合せられて上帝の人を造る』とあります。信仰と望みは、これから未來に達して、これまで信じてゐたところの上帝を見たときは、又これまで望んでゐたところの幸福を享けたときは、二つ共にもはや不用となるけれども、愛は如何まで經ても、不用となることはありません、否きさに行けば行くほど愈々必要に、愈々貴くなつて來ます。彼の『預言は息んでも、外國語は絶えても、知識は息んでも、只愛のみは永く墮ちず』とは、彼の愛を以て天國よりも貴ぶ所の大使徒パウルの證言ではありませんが。(コリント十三の八、九、参考) とも愛の實體は何であるか外ではない、上帝其

者です、「上帝は愛なり」とは、愛の使徒神學者の證言ではありませんか。(イオアンの一) 愛は、此上帝を愛し其本性に倣ふとであれば、固り永遠に亘り、其上帝を見れば見るほど輝き、其幸福を享くれば、享くるほど進んで息む時がありません。故に愛は三徳の中でも、其他如何なる美德の中でも、一ばん大なる美德であります。我らハリステアニンが上帝を信じて善行をつとむるのは、外ではない、此愛のためです。信仰の爲には、此世から嫌はれても、憎まれても、ハリステスを棄てないのも、外ではない、此愛のためです。世の智者は、我らの教を誣ひて「キリスト教徒も、天國の報いを望んで善をなす」といふではないか、してみればやはり利己主義である」と申ししたとが、ありました。が、これは、まだ高尚なるハリステス教の眞意が分らぬのです。眞正なるハリステス教の本義は、決して天國の報いたののために善行を促すものではない、即ち愛の爲です。只我らの中、時として天國の爲といふこともありすが、此は大概愛の代名詞です、又そこに愛が豊かにあるからで

す。尤も上帝は本性が公義であるから、公義に因て我らに賞罰をくだされます。故にたとひ人間がそれを望まないからとて賞罰のあるのは致方がない、否此は必ず有るべきが眞理です。且つ我らは善行をなして幸福を望まぬと言つたところ、元來善行其者が幸福なのであれば、若し幸福がいやなら、善行をせぬより外致方がない。併しながら何人かそんな愚昧な性行を以てゐたならば、たとひ本人がいやでもおうでも、禍は必ず其身に及びます、否その靈魂に及ぶ時節が来るのを免れることが出来ません。聖使徒パウロは世の不敬虔なる者をいまして、即ち人間の爲に大恩ある上帝を愛せずして、自己には只褻瀆と其他の諸罪を有する者であることを謂て「主イエス、ハリステスを愛せざる者は、アナスマたるべし」と申してゐます。(コリント前十六の廿二、二一に「アナフエマ」とは、絶縁のいみで、受造物が上帝から絶縁せられ、即ち罪に陥れたならば、即ち靈魂の死、永遠の苦み、あるはッリです。)

ついでに——本書は、信仰と善行の二編に分けましたけれども、之を信望愛の三徳に分けると、信經は、信徳の部に、主の祈禱と九福は望徳に、十誠は愛

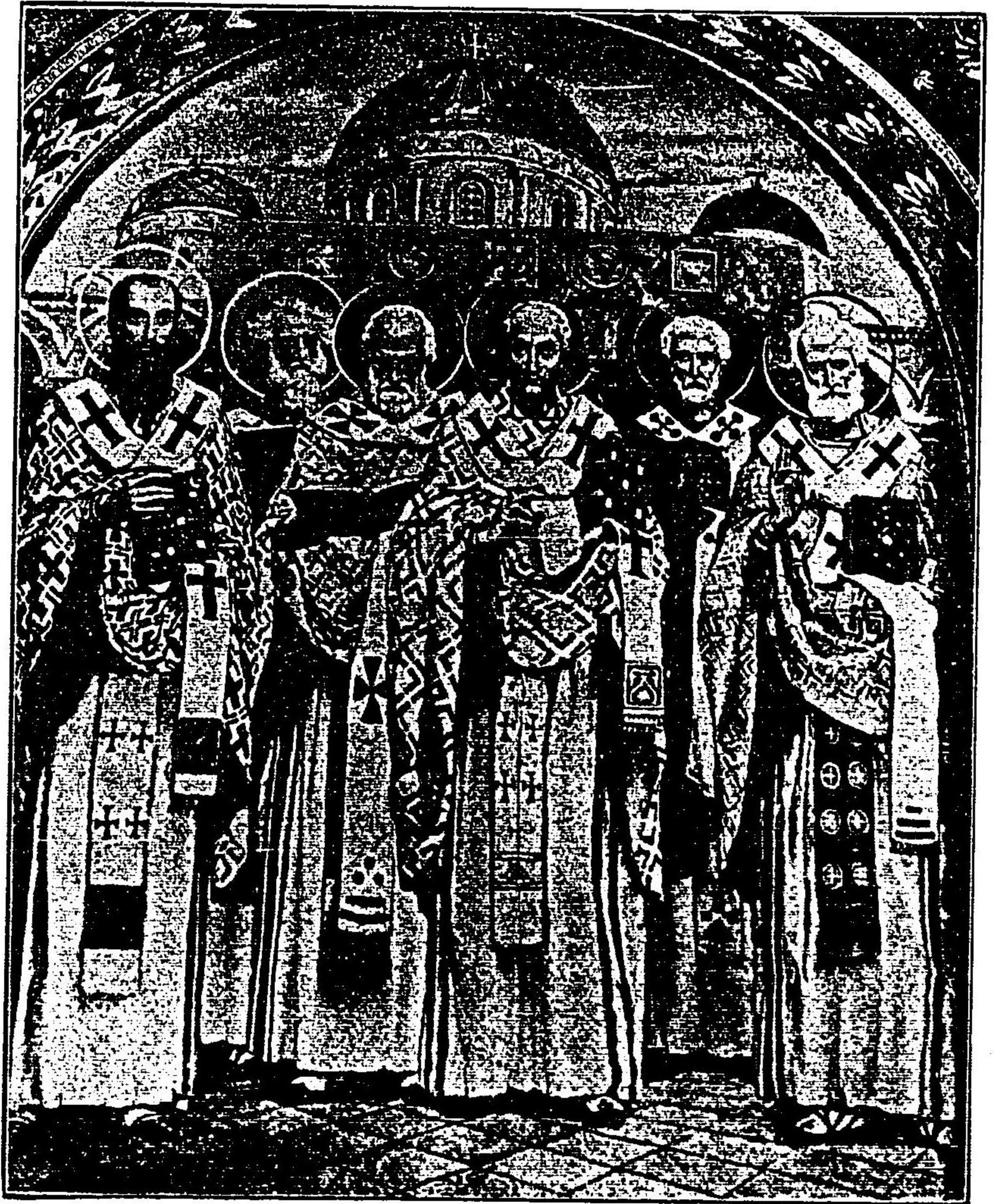
徳に入れて説かれます。

願ねがひくは我われらも、主しゅイ、ス、ハリストスの愛あいと、上かみ帝み父ちちの佑たすけ、聖せい神しんの恩おん寵ちゆうに依よて、永えい遠えんの救すくひを得えんとを、アミン。

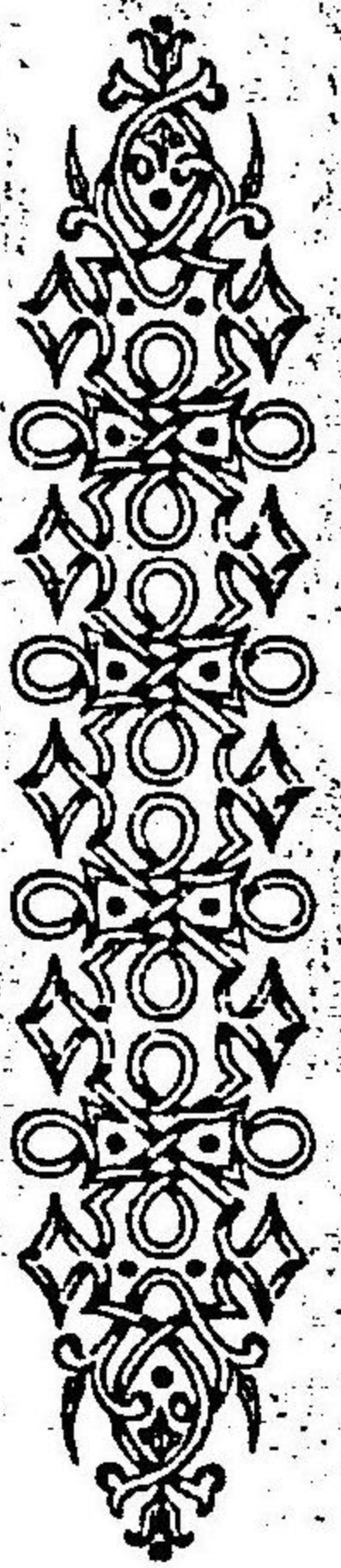


聖人集金献の會教

成 聖 者



イリシラ・イシナハア・イリゴリク・ンアオイ・トンメリタ・イラコニ聖



此に掲げたのは、ロマのパーバ聖クリメントと、ミラリキヤの大主教奇蹟者聖ニコライ、アレキサンドリヤの大主教聖アファナシイ、ケサリヤの大主教聖大ワシリイ、神學者聖グリゴリイと、コンスタンテノポリの大主教金口聖イオアンの聖像の寫しであります。共に信仰と善行を以て上帝の光榮を顯はした大聖人です。此様な諸聖人の傳について精しくおしらべになると、靈魂の利益は勿論又潔き趣味を感じるものであります。……こゝには、只一口ばかりお話申しましやう。

聖クリメントは、第一世紀の頃ロマのフウストといふ人の三男で、父は貴族母は皇族で、其上富んでゐましたから、至て楽しく暮してゐたけれども、それは一

寸の間で、またクリメントが嬰兒の時分に非常な大難が出て来て、一家離散し、皆何處に行たか分らぬとなりましたから、幼きクリメントは、孤の有様で、此世を非常に味氣なく送つて居りました。其後彼は聖使徒ペトルから靈魂の慰めと來世の生命ある教を聽て領洗し、其上恵み深き上帝の御引合せに依て、二十四年ぶりに、はじめて父母兄弟にめぐりあひ再び一家打揃ふた幸福の家庭を成すことができました。聖使徒ペトルの眠る前に、クリメントは、彼から立てられて、ロマの主教となりました。クリメントは、よく教會を治め、且つ多くの異教人を正教に導きました。其頃トラヤン帝の寤逐が激しくなつて、爲に主教クリメントは、其頃に鐘をつけられて遠く海の沖に投込まれました。其後大約八百年も経て、聖使徒命者クリメントの不朽體は、スラヤン民の教化者キリル、メスデイの二大聖人に由て發見されました。(聖クリメントの記) (傳は、十二月八日)

奇蹟者聖ニコライは、第三世紀の後半期頃リキヤ郡に生れ、幼少の時から、人

並すぐれて行狀の著しい人でした。若い時に速かに司祭に立てられました。彼は父母から、多くの財産を遺されましたが、それをみんな施しにつかひました。一例をあぐれば、パタラの一商人が貧苦に追つて三人の娘を苦界に沈めようとするのを聞て夜こっそりとその窓から一度ならず數百金を投込んで之を助けました。又彼はイエルサリムに參る途中、海上に嵐を鎮め、水夫が櫓から落ちて死んだのを復活させて、茲に著しい奇蹟を行ひました。其他彼れの一生は、悉く慈善と奇蹟を以て輝いてをります。シリヤの首府ミラの大主教イオアンが眠つた時、諸主教の議論が紛々として、後任を定めることができませんでした。時に上帝は異象を以て彼れの中に成徳なるニコライを示し給ひ、つひにニコライは大主教の聖位に立てられました。爾來教會は幾ど五十年間も安穩でしたが、デオクリティアンとガレリーの起した寤逐が十年も續いたに由て、大主教ニコライも獄にながれました。其後大コンスタンテンの世となつて彼は放免されましたが、今度は

アリーの騒動に由て、彼は亦大に手腕をふるひました。それから彼は屢、無罪者の死刑に處せられうとする所を知て其奇蹟と明察を以てこれを助けました。彼は大に年老て四世紀の中頃に(降生三百四)安然として眠りました。其不朽体からは芳ばしき膏が湧出て、信仰ある病人等は此不朽体からの奇蹟に依てなほされた者がたくさんありました。(聖ニコライが世を逝つた記憶は、十二月十九日ですが、我が國の正教會では五月廿二日に之を記憶致します、それは彼の不朽体をミラからイメリヤのバルに遷座した日です。)

聖大 アスナシイは、第三世紀の末にアレキサンドリヤに生れました。少年に似合はぬ大なる才智と、聖書に於ける熱心に由て時の主教 アレキサンドルに顧みられました。ニケヤの第一全地公會には、アスナシイは、輔祭の職で、大に雄辨をふるつてアリーの異端を論駁致しました。前の主教が眠つて、彼が主教に立てられたのは、漸く二十八の年でした。其後異端の黨は、皇帝の權力を笠に着て大に大主教 アスナシイに對して窘逐を企てました。けれども大主教は毅然として敬虔と

眞實の定理を護り、正教の爲に夥しき艱難を忍んで、終に四世紀の稍終りの頃(三百七)行年八十で其靈魂を上帝にわたしました。(聖アスナシイの記憶は、二月の三十一日)

聖大 ワシリイは、大約四世紀の前半期より初めの頃(三百三)カパトキヤ州のケサリヤに生れました。彼れの全家は、代々ハリスチアニンで、眞に善美な家庭でありました。成長の後、當時文明の魁を以て有名なるアソンに留學して、こゝにギリゴリイといふ善美な友だちができました。聖ワシリイは、閑暇を以て大惡となして、靈魂上には祈禱と聖書の研究と、形体上には農業と労働を勉め、修道士の生活についても世の中の生活についても善い模範を遺してゐます。前の聖大アスナシイが眠つてから後は、聖大ワシリイが、専ら正教の力ある保護者でありました。猖獗なるアリーの黨も、彼れの嚴正なる品行と信仰の雄辨に對して、如何ともする事ができませんでした。彼はかねて司祭として主教の事を助けてゐましたが、つひにケサリヤの大主教に立てられました。ワシリイの一生中、殊に著しいの

は「哭く者と共に哭いた」とである。(ロマ十二) 彼は燃るが如き熱心を以て富者を説いて、貧者を恵ませたのみならず、最も癩病者の如きを憐んで、彼らを見る毎に、涙を流しました。尙又彼れの一生涯で、も一つ著しいのは、奉神禮の秩序を立て、莊嚴なる聖體禮儀を定めたことであります。然るに彼は、時の皇帝ワレントとアリイ黨の爲に容易ならぬ迫害を受けたのと、自分の牧群の一致の爲に非常な心勞を盡したので、身体健康をそこなひ、行年四十九で眠りました。彼れの訃音を聞いて、ケサリヤの民は、悲み甚だしく泣かぬ者はなかつたといふことです。(聖大ワシリイの傳、一月の十四日です。尙二月の十三日には、神學者聖) 神學者聖大ワシリイは、前の聖大ワシリイと同時代、同郷、同窓で、彼と無二の親友で、共に教會に大なる功勞を立てました。聖大ワシリイの母は、聖婦ノンナで、父はナシアンの主教でありました。ワシリイも、其友なるワシリイの勧めに由て主教となりましたが、彼がコンスタンテノポリに行つた時は、教會の種々

な心配事で、顔には憂ひの色を帯び、服は粗末で、とても主教とは見えない程でした。けれども其一回説教するや、能辨は滔々として精神の堅固を顯はし、聴く者は皆大に感動して、其數は日々益々加はつたといふことです。マケドニイの異端についてコンスタンテノポリに第二全地公會が開かれた時、ワシリイは、議長に撰ばれました。其後病の爲に靜かな所に退いて、祈禱と勤勞の外は、うるはしき文章を以て樂みと致しました。彼は聖大ワシリイより八年後(三百八十七年)に眠りました。彼は世界の美觀と高尚なる論理に依て上帝を讚美し、もつとも至聖三者の定理を大に守つて論證致しましたから、特に「神學者」の名を冠せられました。(神學者聖大ワシリイの傳、二月七日)

金口聖イオアンは、四世紀の中頃(三百四十七年)アンテオヒヤに生れ、其家は富貴でしたが、幼にして父を失ひ、母一人の手で育てられました。イオアンは、其初め異教の學校で教育を受けましたが、其進歩の著しいとは非常でした、けれども彼は異

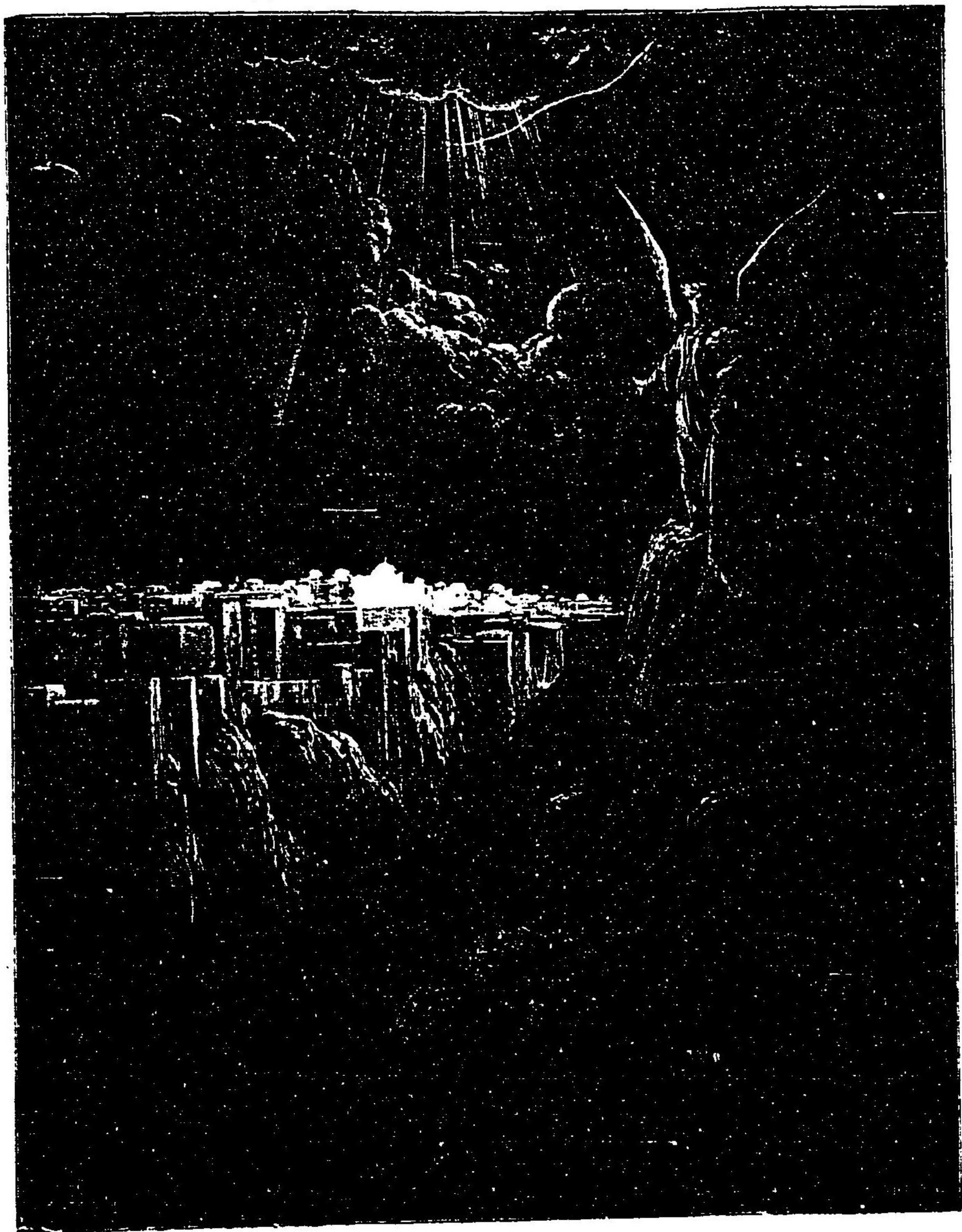
教の哲學や曲學に迷ふとはありませんでした。アンテオヒヤの主教、メレタイは、深くイオアンを愛して、之を讀經者にしました。それからだんく、昇つてつひにコンスタンティノポリの大主教までになつたのです。彼が其驚くべき能辯に由て金口の稱を受けたのは、まだアンテオヒヤの司祭の時分でした。彼は、其行ひの謹嚴なるに、此世の權貴に媚びないに由て、時の皇后エウドクシヤから鋭き迫害を受け、終に流刑に處せられて其配所に送らるゝ途中、護送兵の虐遇と從來積り積つた疲れに由て、コマンといふ村のあたりでもはや歩けなくなり、而して「萬事の爲に光榮を上帝に歸す、アミン」といふ一句を遺して眠りました。(四百七年)それから三十年も經て總主教プロクルに由て聖金口の不朽体は、彼處からコンスタンティノポリに遷されました。(四百三十)時の皇帝小フオドシイと申すは、わざとヘルキドンまで彼れの不朽体を迎へに出で、彼れ大聖人に其父母(即ち先帝アルカダイと皇后エウドクシヤ)の罪の赦しを祈られました。かの聖大ワシリイの聖

體禮儀を節略して編制した所の聖金口の聖體禮儀は、今に年中我がハリストス正教會に行はれてをります。彼は實に世界の燈火萬世の教師、教會の柱石として、信仰に説教に奉神禮に聖書の講究に偉大なる功績を遺してゐます。全世界の教會が大に呼んで之を尊ぶのは、決して無理ではありません。(聖金口の紀傳は二月の九日、コンスタンティノポリに遷した日であります。)

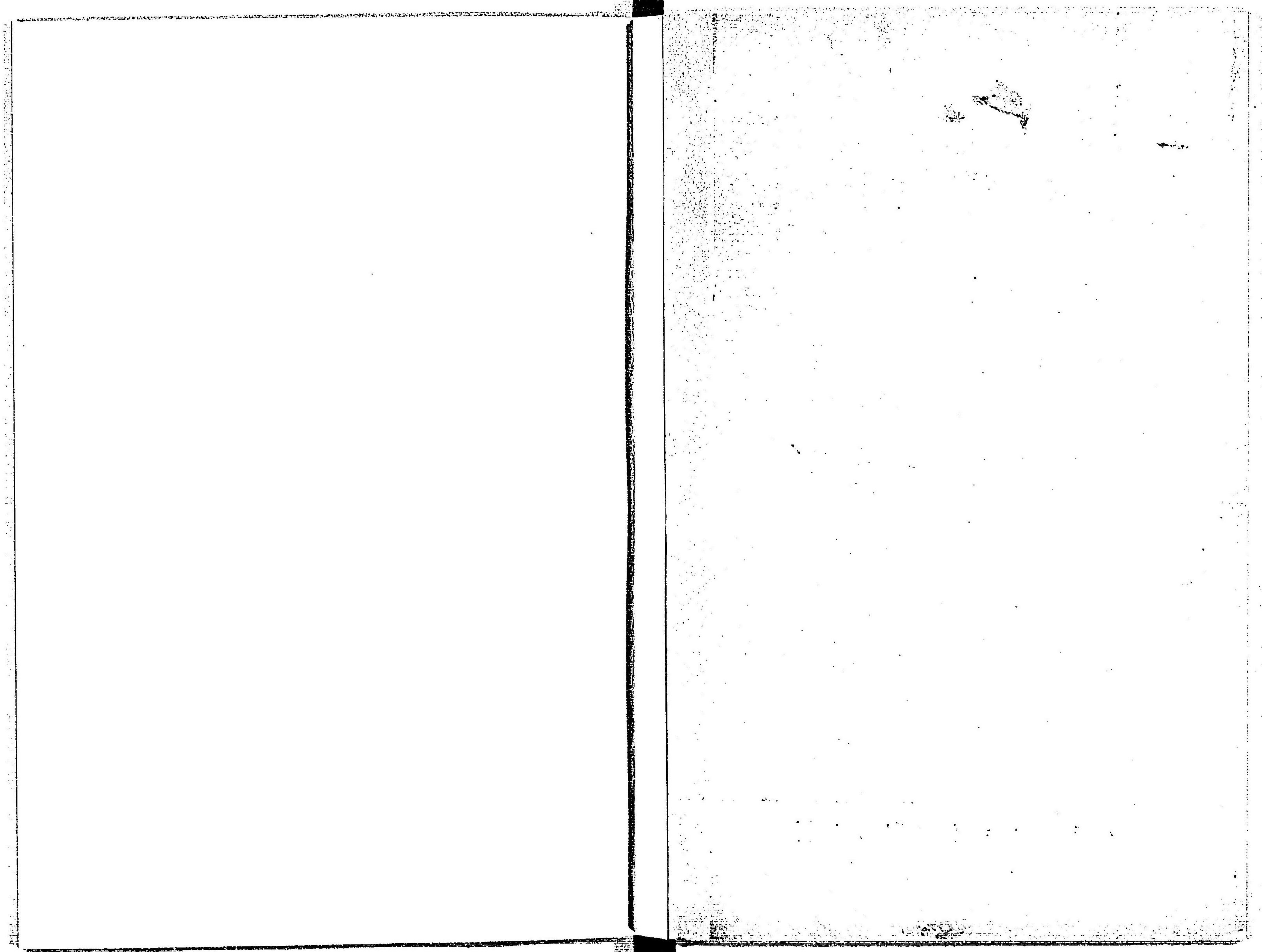
以上の諸聖人の外、正教會にはとても、算へ盡すともできない程、澤山の聖人があります。之を各、その特別な性行に由て類別すれば、聖致命者、修道者、義人、克肖者、捧神者等、其他種々な名目があります。要するに皆主上帝を愛して主イ、ス、ハリストスのお言に所謂「是の如く汝等の光は、人人の前に照るべし、彼らが汝らの善き行ひを見て、天に在す汝らの父を讚榮せんが爲なり」との訓誡を(音五の十六)實にした所の尊者であります。どうぞ我らも彼ら諸聖人の代求に依て救ひを得らるゝとを祈りましやう。

最後に掲げたのは、世界の終りに此償ひた天と地が更まつて新なる天と新なる地となり、乃ち上帝の光榮の國が開かるゝとを、神學者聖イオアンの黙示録から象つた繪であります(黙示、廿一の二、三)。我らの終りには私審判があり世界の終りには公審判が有て、信仰と善行の有た民は救はれて、斯様な光り輝く上帝の國に入り、不信不悔の罪人は外の暗りに陥つて永遠に苦まなければなりません。

願くは我ら罪人も、信仰と善行を勵み、而して至聖童女、諸天使、聖使徒と諸聖神父の祈禱に依て上帝父の仁慈と其獨生子ハリストスの愛と生命を施す聖神の恩寵を諸兄弟姉妹と共にせんことを、アミン。



ムリサルエイ城聖るな新



PHOTOGRAPHED BY [unreadable]

特18

694

絵入りハリストス正教大意

後編

国立国会図書館